

'90—1

北海道民族学会通信

北海道民族学会

札幌市南区南沢5条1丁目1-1

北海道東海大学内

☎(011)571-5111 内線458/459

題字：椿坂小籬(點の会所属)

編集：馬淵 悟・棚橋 訓

発行者：宮良高弘

印刷所：㈱北海道機関紙印刷所

1989年度 第1回研究会発表要旨——○

シンハラ農村の労働交換体系

足立 明*

本報告では、スリランカのシンハラ農村における互酬的労働交換(以下、単純に労働交換とする)の分析を行った。とくに労働交換の経済的な側面に焦点を当て、各世帯の戦略的な組織化の過程を、異なった二村の事例を通して論じた。

このような労働交換というものを考えるとき、多くの都市生活者は農村地域の伝統的な平等主義の一形態と思いがちである。確かに、他の世帯の作業を数日間助け、その返礼にまた同じ日数の助けを受けるというこの交換を、その結果だけ見ていると、その中に飲み屋での等量の酒のやりとりのような、ほのぼのとした平等主義が見えてくる。実際、労働交換についての約束が交わされ、交換がとりおこなわれると、そこには相互扶助に関するさまざまな文化的意味に縁取られた協同労働が見いだせる。しかし一度、農村社会での労働交換を、交換労働に対する需要とそれを満たそうとする各世帯の戦略的な組織化の過程から分析してみると、必ずしもそのような予定調和的な交換だけでないことがわかる。

スリランカの農村の事例を見てみよう。ここで検討する農村の一つはマドゥマーナという伝統農村で、この村では賃金労働が制度化されていないため労働交換によって労力動員を行い、自給的農業生活を行っている。マドゥマーナはこれまで政府による農業開発計画から取り残されてきており、いまだに自給的水田稲作と焼畑耕作を行っているが、このような自給農民にとっての基本的な生産コストは労働過程における“骨折り仕事(drudg-

ery)”である。そのため生産コストとしての“骨折り仕事”の低減のために、彼らはいろいろな努力をする。そしてその一つが労働交換を行うことである。というのも互酬的労働交換を組織した場合と、しなかった場合を比べると、ともに各世帯が支出する労働量の総体は変わらないものの、労働交換を組織し適正な労働力動員をした場合は、いろいろな技術的・心理的な便益が獲得でき、その結果として“骨折り仕事”がへるからである。

もう一つの農村はヌワラヤーヤという入植地で、ここでは賃金労働が自由に利用できるにも拘らず、大規模な労働交換を組織し、米の小商品生産を行っている。というのも、ヌワラヤーヤでは農業開発計画に基づき小商品生産としての水田稲作を営んでおり、先ほどの“骨折り仕事”の低減のみならず、農業労働者への賃金の出費の節約と、他に就業機会のない世帯労働力の農業への最大限の利用のために大規模な労働交換を組織するのである。

このようにマドゥマーナやヌワラヤーヤでは交換労働は希少資源であり、各世帯が程度の差こそあれ必死で確保しようとするのである。そしてそのため、これらの二村では社会経済的条件の違いから組織形態に差があるものの、希少資源としての交換労働を最大限確保するために都合の悪い相手を避け、より都合のよい相手と組む戦略的な組織化が行われる。つまり、協同のための競争が行われるのである。

結論的に言えば、これらの農民は彼らのおかれた生態的・社会経済的諸条件のもとで明確な意志

決定を行い、意識的に労働交換を実践しているということである。もちろん労働交換は前資本主義的な労働組織の一形態であり、前資本主義的経済にその歴史的な起源を持つものである。しかし、本報告からわかるように、労働交換は明らかに文化的遅滞でもなければ、前資本主義経済の残滓でもなく、彼らのおかれた現在の生態的・社会経済的諸条件に対する一つの意識的な適応形態なので

ある。そしてこのことはスリランカにおいて飛び石的に点在する自給的農村のみならず、今後も増え続けるであろうヌワラヤーヤのような入植地においても、労働交換が積極的に行われることを示唆している。またここで示した互酬的交換のパターンは、単に農村社会の労働交換のみに当てはまるだけでなく、その他の互酬的経済交換にも一般化できる可能性がある、と、報告者は考えている。

流れとしての社会

—ソロモン諸島の事例から見た還流的人口移動の諸問題—

棚橋 訓*

本報告では次の二点を通じて、人類学における人口移動研究の諸問題を指摘する。第一に、ソロモン諸島のマライタおよびチョイスール島諸社会に認められる特異な双系出自集団の形成と分枝のプロセスを中心として、社会組織の柔軟性について論じる。ここでは、各集団の土地保有および土地用益権の様態に着目する必要があると強調される。第二に、双系出自集団と言う観点から検討したソロモン諸島社会の特質を、同地域の人口流動性を巡る特質と重ねあわせる。第二点については、当然そのコンテクストとして西欧世界、特に英国の手になる植民地的状況が熟慮されねばならない。人口の流動性を捉える場合には、ソロモン諸島民にとっての新しい“労働過程”創出の影響を特に分析することが求められる。

ソロモン諸島社会を俯瞰すると、その人口移動性が高く、長期・短期にわたり様々なタイプの生活圏を形成していることがわかる。その人口の流動性も個人のレベルから系譜関係により結び付けられる小集団まで多岐にわたって生起している。ソロモン諸島社会についての考察は、広義での人間の移動が、接触の前後を通じて当該社会の本質的(intrinsic)な特質の一つであったと認めることから始まる。

人口の移動パターンがその社会の有り様に本質

的に関わることが判明したとしても、その先に更に重要なステップが待っている。つまり我々が言うところの“人口移動”の基本的特質とその史的背景を社会成員自身の構成的概念に踏み込んで質す必要がある。この点については、ChapmanとProtheroが“第三世界”の人口移動研究をめぐる主題のひとつとして論じている。

第三世界における人口移動、とくに短い周期の還流的人口移動は移動性の一つの形態として西欧からの影響のもとにのみ生起したわけではなく、むしろ伝統的な“村落ベース”にも移動性の概念があり、この概念は植民地的状況下の社会経済的転換期を通じて固持され、増幅されてきたと解釈される。逆に言えば、第三世界の史的状況における社会のモビリティの詳細は、当該社会の基本的性格を示す徴候群として見なされることで正当な解釈をあたえられ、その重要性が浮かびあがってくる。諸々の広がり多様な時空間内に占める人口移動のパターンは、静態的=疑似歴史的な社会集団成員の再構成をするためのデータではない。ソロモン社会の事例に立ち戻れば、当該社会の日常性を説明する鍵として、社会の動態的特質とフラックス(流動)が抱える“曖昧さ”の問題が着目されるのである。

1990年度 第1回研究会発表要旨——○

近江一村落におけるソーレンシンルイとトウヤ制

林 研三**

*北海道東海大学国際文化学部

**札幌大学法学部

本報告は、滋賀県八日市市上羽田町北方における家族・親族・村落構造を概観したものである。当地に関するモノグラフ的素描は、すでに旧稿⁽¹⁾において発表している。従って、本報告は旧稿との多少の重複があることを予めお断りしておきたい。

北方は調査開始時(昭和61年2月)現在で34戸、176人が居住していた。このうち4戸は戦後の転入戸であり、残り30戸を今回の調査対象とした。この30戸間の過去四世代での通婚、養子縁組例は、各々15例と6例である。また、この間に分家した家は7戸存在する。これらのことからだけでも、かなり錯綜した親族関係が知られてこよう。

ソーレンシンルイとは、機能的には、その名称によっても示されているように、主として当該戸の葬儀運営の合力基体の中核を構成する北方内居住戸である。これは、概ね上位三世代までの姻戚関係を有する家、本分家関係を有する家を含んでいる。しかし、必ずしも一定範囲の親族圏内のすべての家が、当該戸のソーレンシンルイとして認知されているわけではない。各戸の当主の判断によって取捨選択がなされている事例もみられる。この点からすれば、これは当該戸との二戸間関係の束として理解することも可能かもしれないであろう。

このような家結合関係の特性は、地縁を一契機としたトナリ関係、および「神事」と呼ばれる村総会の場でもみられる。この「神事」は、毎年1月10日に開催されるが、その会場となる家を、その年のトウヤと呼んでいるのである。当日はムラの構成戸31戸(転入戸1戸を含む)の当主が参集し、トウヤの神棚に参拝した後に、伊勢神宮等へ

の代参者・自治会役員の選出、虫のぞき等を行う。トウヤは、31戸の持ち回りによって順次担当していく。新たなムラ入りをなした家(分家、転入戸)は、その翌年には必ずトウヤをつとめなければならない。このことによって、最終的にムラの構成戸として認知されることになる。つまり、この「神事」はムラを具現化する場ということにもなる。そして、当日各当主がトウヤの神棚に参拝することによって、これが開始されることなどからすれば、トウヤとなる家と他の各構成戸との二戸間関係が、年毎に再生、確認される場でもあろう。つまり、各戸がトウヤとのそれぞれの結合関係を確立することによって、当地でのムラは存立しているのではなかろうか。

従来、日本の村落構造に関しては、いくつかの類型論が提示されてきている。北方でのこの事例がこれらの類型論とどのように整合していくのか否かは、ここでは結論づけられない。しかし、村落構造論においては、家族・婚姻・親族慣行との適合性とともに、ムラそれ自体の構造原理をも問う必要がある。家族・親族レベルではなく、ムラ構成戸として、どのような家結合関係が維持、形成されているのかという視点である。この視点に立つならば、本報告の事例も日本の村落構造を論じるうえで、若干なりとも役に立ちうるかもしれないであろう。

〈註〉

- (1)拙稿「家族・親族慣行と村落社会」(『早稲田法学会誌』第37巻所収)および拙稿「村落構造に関する一考察」(『明治大学社会・人類学会年報』第1号所収)。

自己と他者の共通体験からみた災禍の語り

— 八重山地方の一事例から —

太田好信*

この発表は、沖縄県石垣市で採集した災禍の語りについてのケーススタディ形式による報告である。人々は〈物語る〉ことにより、災禍体験を文化的に有意義な経験へと再構成していく。こうして成立した物語—それは過去に起きたパラパラな出来事の間の一つの関連性を見出すことである—

へ人々を誘うものは何であろうか。ここでは、一方において、私自身の病いの体験などがユタの解釈を通し、独特な物語へと展開する過程と、他方において、現地で採集した災禍体験の語りの一例を比較することにより、以上の疑問に私なりの解答を提示しようと思う。

人類学的分析は、自己としての調査者、他者としての現地の人々との間に、経験上での〈断絶〉を前提として成立している。この前提はある重要な視点を排除してしまうのではないか。その視点が開く新たな可能性を、最後に確認してみたい。

以下に提示する語りは、私が民族誌として再構成したものであり、固有名詞はすべて仮名である。

伊良部健良は30歳半ばではあるが、石垣市では常に漁獲高1、2位を争う優れた漁師である。彼の次女、圭子(11歳)は、昨年の暮れ、突然頭が痛いと言いながら泣きだした。目は中空を見つめ、焦点も定まっていない。男の人の姿が見えるという。

ところで、圭子は11月にも同様の状態に陥り、20日間も学校を休んだ。八重山病院の医者もその原因を見つけることができなかった。そのとき相談を受けたト占師(ユタ)は、「子年生まれの人が憑いている」と言った。実は、伊良部健良の母方の叔父にあたる川門一郎という人が、10年前、健良とその漁師仲間の上地アキーとともに、通称ウキナグチ(平久保沖の珊瑚礁)での電灯潜り(夜間の矛突き)漁の最中、潜水病で死亡する事件があった。一郎はまさに子年生まれであった。その夜、健良の妻、和子は一郎に6本のタンクを持って行くように勧めているが、一郎は6本めの潜水で死亡している。

その後、和子は川門家から遠くない天川御獄の横でオートバイ事故にあい、大怪我をした。また一郎の三男、ヒーローは、父親の死後、健良の船に乗り働いていたが、5年前の夏、漁労中に水中銃の操作を誤り、自らの腹部にシャフトを突き刺し重傷を負った。このときから、健良は酒に酔うと「一郎オジが死んだのも、ヒーローの事故もワッターの責任あらぬん」とよく口にするようになった。

昨年以來、圭子が先に述べたようなカンプリ(憑依状態)を示すと、母親の和子は、憑いた霊が一郎ではないかと疑い、ユタのもとへ通い始めた。一郎の死に少なからず責任を感じている健良や和子にしてみれば、叔父である一郎の死後、次々に起こった事故、そして最近始った圭子のカンプリ、といった出来事を一郎の死という事件と結びつけ

て考えるのも無理からぬことであった。ぼんやりと感じるだけではあるが、完全には否定しがたい一郎の死に対する自責の念。健良や和子にとり、この言い尽くせない気持ちに形を与えることが、すなわち一連の事件についての語りである。

以上の解釈は分析の結果得られたものではなく、私自身の病いの体験を反省することにより辿り着いたものである。

というのは、圭子に憑いた一郎の霊を龍宮へ導く儀礼が行われた日、私は、悩んでいた顔面神経麻痺や結婚後7年目になるが子宝に恵まれないことなどを、ユタに相談してみた。その後行われたユタのハンジの中で、ユタは、私が、以前のフィールド調査中に採集した黒島の願口や神口を返してくれといわれ、耳がそのために痛む、と言った。確かに私は、これらの資料は採集すべきものだったかどうか、意を決しかねていた。つまり、ユタは、私がかうまく言葉に表現できない感情に形を与え、そのことにより自らが提供する語りに説得力を持たせる。今迄は現実性を帯びていなかった感情が突如として意識の中心を占めるようになり、その位置から自分の過去が見通され、経験が再構成されてゆくのである。

この発表では、人々を〈物語〉へ誘う要因を感情という、人類学的研究では従来あまり注目されることの少なかった領域に求めてみた。ようやく最近になり、フィールド調査での経験をラディカルに反省することから、自己と他者の断絶が理論上の虚構ではないか、と批判する動きが出始めている。例えば、ロザルドやダンフォースらの仕事それがそれである。

この発表で、「災禍の語りは、実際に似たような経験をした人にしか理解できない」という立場を私は支持しているわけではない。そうではなく、今迄、学問の枠の外部へと押し出されてきた類似体験や感情という、人間の感覚や感受性に関わる領域を、他者理解への一つの契機として人類学の中に呼び戻す運動を支持したい。それらの領域は、ともすれば簡単には言語化されない領域かもしれない。しかし、そこには、新しい人類学の可能性があるのでなかろうか。